「今だからこそ・・・」（その２）

2020 11

「ザ・バンド」のドキュメンタリーを観た。“かつて僕らは兄弟だった”というサブタイトルのその映画は、私にとっては映画的にというよりも世代的に切なかった・・・
音楽まみれになって過ごしていた二十代の頃、それこそ浴びるように聴いた曲ばかりが使われている。何度もグッと来た。

音楽はいい・・・そして映画もいい・・・

その前日は、敬愛する先輩、原一男監督の新作『水俣曼荼羅』の特別試写会があり、観せてもらった。六時間に及ぶ大作だった。15年間の記録というだけあって、「時間」と「人間」をしかと見つめた傑作だった。来年公開の予定らしい。日本中、世界中の人が観るべき映画だと思う。

実はもう一本、日本中、世界中の人に観てほしい映画がある・・・言わずと知れた『えんとこの歌』だ。何故観てほしいのかといえば、ちゃんと理由がある。三つほど挙げてみる。

まず一番目は、いつ収まるとも知れないコロナ禍で、誰もが「痛み」を抱えながら生きることを強いられている今だからこそ、街の片隅で40年近くにわたってベッドに横たわり、寄り合いながら、脳性マヒの障がいからくる「痛み」と共に生きつづけてきた友人・遠藤滋の「えんとこ」を鏡として見つめ、耳を澄ますことで、私たちの今を、私たちのこれからを、受け取めてほしいと思うからだ。
テレビや新聞やSNSで答えを探すのではなく、私たち自身に問いを向けつづけること・・・映画を観て、問いを深めてほしい。

「だって、君はひとりで勝手に
何かをやってゆくことなんて
出来ないだろう？」

主人公の遠藤滋のメッセージは、私たちが「痛み」を共にしている今だからこそ、「共に生きる」という在りようを、お互いが手探りしてみようと、語りかけているように思える。まるで、この状況を予見していたかのように・・・
きっと誰もが、自分事として、勇気をもらえる映画だ。日本中、世界中の誰もが。

二番目の理由は、このままの状況がつづくと私たちのような自主製作・自主上映で映画を創るというナリワイ自体が無くなってしまう、という切実な思いだ。
私は曲がりなりにも、40年近くにわたって自主製作の映画創りをやり続けてきたけど、後輩たちに、「大丈夫！」と背中を押すことができるようでありたい、ということだ。ヨソ見せずに、しっかり映画を創れば、ちゃんと観てもらえるんだ・・・と。だから「えんとこの歌」を大ヒットさせたいんだ。

もうひとつの理由は、我が「いせフィルム」存亡の危機を、映画を拡めることで救いたい。小さなボートのような舟の船長として、これまで必死で荒波をくぐってきた。ボロ舟だけど、本当によう踏ん張ってきた「いせフィルム号」に、何とか、もうちょい航海させたいのだ。
そのために、ぜひ『えんとこの歌』を上映してほしい。一人でも多くの方に観てもらうことがレスキューになるから・・・

『えんとこの歌』は毎日映画コンクールにつづいて、この秋、文化庁映画賞も受賞。自慢したいわけではなく、いい映画だから観た方がいい、観てほしいと言いたいんだ。

頼む・・・！！

伊勢　真一

カントクのつぶやき　二〇二〇年十一月